

上級教材とその扱い方

木村宗男

I 上級の目標

一般に外国語を学ぶものがそうであるように、日本語を学ぶものも、なんらかの目的のための手段として学ぶのが圧倒的に多い。ことに、この講座の第1分冊・第2分冊で取り上げたような初級・中級の課程を経て、上級へ進んで、さらに学習を続けようというものは、例外なくといっていいくらい、それぞれの目的を持っている。その目的は日本の大学への留学、専門分野での研究・調査、技能の研修、実社会での業務、宗教活動などいろいろである。このような目的を果たすのに必要な日本語の能力を身につけるために、日本語を学ぶのである¹⁾。そのような日本語能力を得るための学習を3段階に分けた場合の最終段階であり、学習を完成する段階が上級である。

実際は、日本に來ている学習者の多くのものが、上級の修了を待たずに、各自の本来の目的のための勉強や仕事を始めている。上級の学習はそれと並行して行なわれる場合が多い²⁾。

1) 日本語そのものの研究を本来の目的としている言語学者や、将来日本語によって身を立てることを志望しているものもあるにはあるがその数は全体から見ると少ない。

2) 早稲田大学内の留学生の大部分のものが、学部または大学院での授業の一部として日本語の上級を学んでいる。理工・商・政経の各学部では、外国学生に限り日本語を第2外国語として履修することが認められている。その他の学部・大学院でも、ごく少数の日本語優秀者を除いては、入学後1か年は日本語を必修することになっている。日本語教員志望者・日本文学専攻志望者のためには、上級の上に研修というコースを日本語教室に設けて、発音・文法・表記・教授法・現代文・古典・漢文などを学ばせている。

最終段階としての上級の学習目標は、専門分野での修学・研究または業務を日本語によって支障なく行なうことのできる能力を養成することである。しかし、限られた学習期間に、将来必要とする日本語のすべてを習得し尽くすことは不可能である。上級修了後も専門の仕事と並行して、日本語の勉強を続けなければならない。そのような自学自習を行なうことのできる素地を作ることが、上級の目標であると言っていいだろう。自学自習の能力とは、言いかえれば、一般日本人並みの日本語の言語生活を、音声・文字両面にわたって行なうことができ、専門の勉強・仕事に必要な最少限度の術語の知識を持っていることと、その上、何よりも大切なことは、辞書を使ってみずから学ぶことができるということである。

II 上級の教材

1. 教材の内容

上級の教材に盛り込むべき内容について考えてみよう。学習者はすでに初級・中級で基本的な語彙と文型を習得し終わったはずである。上級では語彙を増強し、種々の文体に慣れることが学習の主眼であると言っていいだろう。そこで、このような内容を多く含む材料を教材として選ぶことになる。

語彙は一般語彙と専門語彙に分けて考えることができる。一般語彙としては、日本人の高校卒業者が理解する程度のもを目安として、できるかぎり多くの語を学ばせるようにすべきである。それも単に異なり語数が多ければよいというのではない。既習語の第2義的・第3義的な意味、多義的な意味を習得させることと、比喩的な意味・用法にも通じさせることが上級としては大切である。また、上級教材というと、とかく漢字語彙の学習にのみ重点が向けられやすいが、和語にも同様に重点をおかなければならない。そのほか、普通日本人の使う慣用的な語句の使い方、常套の表現なども上級教材に盛り込むべき重要な要素である³⁾。

3) 本講座第2分冊 森田良行「慣用的な言い方」が参考になる。

専門語彙はそれぞれの専門によって異なるから、画一的には言えないが、高校教科書程度の術語・用語のうち、各自の専攻・業務に関係のあるものを一応習得しておくようにしなければならない⁴⁾。

文体については、論文、評論、法規、公用文など文字言語独得の文体に慣れさせる。与えられた文章がどのような種類のものであるか、文体によってまず見当がつくくらいに慣れさせなければならない。将来古い文献を扱う必要のあるものは、文語文、漢文、擬古文ないし古文などにも一応ふれさせておかなければなるまい。

漢字は中級までに約 1,000 字から 1,300 字くらい覚えたはずである。上級では当用漢字と同補正案の漢字はもちろん、それ以外の漢字も、特に専門分野と関係のあるものは、できるだけ多く取り入れておく。また、漢字に限らずかなづかいも含んで、表記法については柔軟な考えをもって教材に取り入れておくことが上級では必要である。ただし、学習者自身が文を書くときには、現代の標準的表記法に従わせることを忘れてはならない。

以上は主として読解の教材について述べたが、音声言語のより高度な学習を進めるための教材も欠くことはできない。講義の聴講、ゼミナールへの参加、研究発表、実地調査などに必要とする聴解ならびに口頭発表の能力を養うため、ラジオ・テレビのほか種々の録音教材も用意しなければならない。

教材の種類

日刊大新聞の社会面、文化欄、第 1・2 面の政治・外交・国際問題などの記事と、専門によっては、これに経済面、科学・学芸・読書・家庭などの各欄が教材を提供してくれる。ニュースばかりでなく、各種のコラムにも利用できるものが多い。新聞を何か一つ月極めて購読させるとよい。

4) 文部省編「外国人のための専門用語辞典(自然科学系)」(1966 年)があるが、残念なことに非売品である。当語研日本語教室でも「専門用語集」(理科用・社会科用)を作成中である。

雑誌は週刊朝日、サンデー毎日、朝日ジャーナル、文芸春秋などの中から、適当な記事を選んで教材とする。政府関係の刊行物や大企業の PR 雑誌にも、かっこうな教材となる記事がある。PR 雑誌はだれにでもわかるということに基づいて書かれているので、一般日本人の読解力の一つの水準を示すものということができる。

単行本を教材とするには、一般教養向きの新書判程度のものが適当である。小説なども、ものによっては教材として使えるが、教材が文芸偏重になるのは好ましくない。小説を教材として採用するには慎重な考慮を要する。

この種の単行本のうち、語研日本語教室で使用して、適当であったと思われるものを付表にあげておく。〔付表 I〕

専門的な語彙・文体に慣れるためには、専門分野の入門書または一般向解説書などから選ぶ。専門の研究をこれによってさせるわけではないから、内容的にむずかしいものでない方がよい。

上級用として編集された日本語教科書を付表 II にあげておいた。これらは数多くの著作から適当な部分を抜萃して配列したもので、多様性に富んだ教材を与えるという点は確かにいいことだが、各課があまりに短い。それに、多様性といっても、限られたページ数では限界がある。しかも当然のことながら、編集者の属する教育機関の学生を対象として材料を選択するので、他の機関の学生には向かないものも混じっている。上級教材はやはり各機関ごとに独自のものを選んで与えることが望ましい。

単行本を教材として与えることにも欠陥はある。単行本 1 冊は教材として分量が多すぎる。長期間同じ教材を使用することに学生は倦怠を感じやすい。この欠点を避けられるなら、教科書という特殊の形に印刷したものより、生のままのものを教材として使う方が实际的で、上級にふさわしいと言える。そこで、数冊の本を並行して使用し、しかも、1 冊を終えないでつぎのものに移るといふことも考えられる。当語研の日本語授業では、上級の第 1 年度は週 6 時間の授業に、一般的な読みのもの、ことばに関

する読みものまたはテレビ教材、専門に近い読みものの3種を並行して与えている。第2年度は週4時間となり、一般的なものと専門に近いものを各2時間とする。

教材選定に当って、学習者の興味を考慮することは学習効果をあげるために必要なことだが、学習者の欲するものを無条件に教材として使用することはさなければならない。学習者は自己の学力を考えず、ただ興味によってのみ教材を決めようとするものである。どうしても読みたいという場合は自習用として与えてみる。もし自習できる程度なら教材として採用する必要はない。またもしむずかしすぎて歯が立たないようなら、教師の選んだ教材で学力をつけてから自習させることにすればよい。

個人教師について学んでいるものに、たまに見うけられることだが、学習者が読みたい本を指定し、教師の逐語解釈または翻訳によってようやく理解しながら読んでいるものがある。これなどは上級の授業とは言えない。上級というのはただ教材がむずかしいというだけではない。上級としての扱い方をしなければ上級とは言えない。そのような扱い方ができないのは、その学習者に上級へ進む学力がないものとしなければならない。上級修了以上の者が専門的な書物を読むために個人教師の指導を求める場合がある。この場合はもはや専門的領域にはいっているのだから、専門畑のものが指導に当る方がよい。

日本の高校や大学の一般教育の教科書が教材として扱われることもある。これには学習者に教科の内容も含めて学習させる場合と、単に用語のみを覚えさせる場合とがある。前者の場合は、日本語教育のわくを越えているので、その教科の専門家が指導に当たっているのが普通である。

テレビはこんにちの日本人の社会における重要なマスメディアになっている。単に学習の補助的教材というよりも、それ自体が学習の対象となる主教材として取り入れるべきである。音声に慣れるという消極的意義ばかりでなく、テレビ独得の表現形式が学習の対象として意義がある。テレビを教材とする場合に、ドラマなど娯楽番組はさけた方がよい。学習者が見

たがるなら勝手に見させておく。教材としては報道もの・対談もの・教養ものなどが適当である。NHK の番組で言えば(昭和 42 年 5 月現在)「日本ところどころ」「町から・村から」,「新日本紀行」などや、ワイド番組中の対談などからはいっていくのがよい。それからニュース・ニュース解説・報道特集・教養特集へと進むことになる。

テレビに比べると、ラジオ・映画のマスメディアとしての力は近年弱くなったが、教材としての利用価値はある。ラジオの朗読・対談などには、高度の聴解力を養うに適したものが多く、映画も文化映画・産業映画・科学映画などでそのまま教材となるものが多い。

テレビ・ラジオ・映画を教材として使用するに当っては、教師が予め試験・試写して、予習しておかなければならない。授業の際にも 1 回通しては効果が少ない。録画・録音したものを必要に応じて何回でも繰り返すところに教材としての効果が期待されるのである。

III 上級教材の扱い方

辞書の使用について

上級の目標が自学自習の学力をつけることにあることは前に述べた。自学自習の学力は予習によって養成される。未知の語句の意味を自力で徹底的に調べることを学習者に要求する。教室では予習で調べたところを検討し、足りないところを補うにとどめ、教師による逐語的解説はしない方がよい。予習は辞書によって行なわせる。辞書の使用には時間と労力を要するが、日本語の学習には欠くことのできない作業であって、決して無駄なことではない。

辞書は和英辞典など対訳辞典は最後の手段として使うにとどめさせる。まず国語辞典や漢和辞典によって語義を求めさせる。対訳の辞典の訳語は必ずしも原語の正確な語義を示すものではなく、近似的な訳語にすぎない。また、対訳では原語の語構成を知ることができない。その上、訳語によると原文を理解するのに、訳語を当てはめる訳文を考えることになり、翻訳

という手続きによって理解するという習癖から抜け出すことができない。しかし、そうは言っても外国人が国語辞典や漢和辞典を使いこなすことはなかなかむずかしい。むずかしいけれども、これは克服しなければならない。そこで教師は外国人の使いやすい辞書を選んで与え、その使い方についての指導を行わなければならない。文部省編「外国人のための漢字辞典」はその名のごとく特に外国人のために作られたもので、学習者に使いやすいようにできている。なお、文部省では「外国人のための用例辞典」も作成中である⁵⁾。

辞書の使用に慣れさせるために、授業の終りに次回の授業で扱う部分の新出語の読み方または漢字の総画数ないし索引部首を教えておく。このようにすれば、学習者は容易に求める語句または漢字を見つけ出すことができる。辞典特有の語釈の解釈の仕方を教えることも必要である。語研の中級教科書では、単語表に英語と中国語による対訳のほか、日本語による語釈を示している。中級第3部に進むと、国語辞典から引用した語釈のみを示している。これらはすべて辞典式の語釈に慣れさせようとの配慮からである。上級になっても辞書がうまく使えないというのは致命的な欠陥である。既成の日本語教科書のほとんどのものが、上級になっても、新出語にいちいち訳語を与え、しかも、文中に表われる順に並べている。これは一見親切なやり方のようにだが、上級という段階にはふさわしくない。このような訳語にたよって上級を終えた学習者は、その後自力で学習を続けることがむずかしい。上級の勉強は辞書との取っ組み合いだと言っても言い過ぎではない。

語彙について

上級では語彙の増強に努めなければならないが、語句の意味の取り扱いには慎重でなければならない。個々の語句について教師が明確に意味を把

5) 文部省編「外国人のための漢字辞典」1966年大蔵省印刷局発行、定価 3,000円。政府刊行物センターで販売。「用例辞典」は1968年度に刊行の見込みである。

握して、類義語との差異を明らかにし、同意語・反対語・対照語をあげ、さらに用例を示すことが必要である。これらのことは学習者にも予習のとき調べておくことを要求し、教室で言わせるようにする。語句の意味はこのようにしてはじめて明確に理解される。一般に通用している訳語と原語との間に意味領域や用法に大きな差異のある場合には、特にそのことを指摘して注意を促すことも大切である。訳語のみにたよって語彙をふやすと、ふえた語彙がいたずらに学習者を混乱に導くことになる。

語句の意味の取り扱い上問題となる訳語の例を、筆者が使用した上級教材から取り出してつぎにあげてみよう。訳語は Nelson の最新漢英辞典または研究社の新和英大辞典による。

訳語だけでは意味・語感を明確にできないものの例。

敬遠する keep a person at a distance; give (a batter) a walk; kick upstairs

本場 home, habitat, center; the best place for

機運 luck; tendency; opportunity

慣行 usual practice, habitual practice, routine

大わらわで with all one's might

拍子抜けする be discouraged; be disappointed, lose interest

述懐する speak reminiscently, express one's thought

雅号 pen name, pseudonym; nom de plume

出处進退 appearance and retirement, advance and retreat; one's move; a course of action; one's daily activities

遺業 work left at death, unfinished work

訳語では意味のちがいがい・使用区分を明瞭に説明できないものの例。

性質 nature, disposition, temperament,

性格 character, personality

性情 character, disposition, nature

性分 nature, disposition

気質(きしつ) temperament, disposition

気質(かたぎ) spirit, character, trait

気骨(きこつ) spirit, soul, backbone

根性 disposition, nature
性根(しょうね) nature, desposition, spirit
心服 admiration, devotion
心酔 fascination, admiration, devotion
心機一転 change of mind, changing one's mind
心がわり change of mind

上に並べたような語が、個別に文の中に出てくる場合、訳語によってその個所の文意を理解することは、あるいはできるかもしれない。しかし、類義語との意味・用い方の差異は習得できない。訳語の数が多くなればなるほど混乱を起こすことになりかねない。

つぎに、単なる意味のほか、語源・故事・背景の説明をしなければ、学習者が理解に苦しむものの例をあげてみよう。

先鞭をつける take the initiative; forestall; anticipate; steal a march upon; pioneer; take the wind out of another's sail; get the start of; blaze one's trail

策を負う depart for education, go to.....for a purpose of study
切羽詰まって be at one's witt's end; under the pressure of necessity

いざ鎌倉という時 in the day of peril; in case of emergency; in the moment of danger; when an emergency arises; in an emergency moment

還暦 one's 61st birthday

知己 acquaintance, appreciative friend

呉越同舟 (bitter) enemies (placed by fate) in the same boat

四面楚歌 completely surrounded (by the enemy); find oneself betrayed by all of one's countrymen; be forsaken by everybody

打出の小槌 a mallet of luck, an Aladin's lamp

泥縄 unpreparedness, last-minute preparations; locking the barn after the horse is gone

春秋の筆法 the principles of Confucius' historical criticism

上に示した語句とそれに対応する訳語を見てもわかるように、学習者が対訳辞書にたよっているかぎり、原語の意味・語感・使用区分は会得でき

ず、いたずらに似たような語句が多いという嘆きを深くさせるばかりである。このような語を取扱うときには、各語を構成する漢字の意義から説明して、わずかの意味のちがいが明らかにし、使用区分を用例によって示すことが必要である。単に「ニューアンスのちがいがいい」としてのみかたづけしてはならない。対訳のみにたよって授業を行なうことの最大の害は、教師が日本語そのものについての深い掘り下げを怠りやすいということである。語義の解説は日本語でなくても、外国語で行なう方がよく理解できるのではないかという考え方もある。これは対訳のみを与えてすまずよりはいいけれども、上級の学習者なら日本語による解説で十分理解できるはずである。またその方が聴解の勉強にもなる。もし日本語による解説が理解できないというなら、その学習者はまだ上級に進む学力がないものと言わなければならない⁶⁾。

固有名詞について

語句の意味は文脈できまるものであり、文脈の把握は場面によって助けられる。場面はまたその背景とつながりを持っているのである。語句の意味をよく知っていて、文法的に文の分析ができて、なおかつ文の意味を理解することができないことがある。言語の背景、その言語が使用される社会についての知識が足りないためである。日本語の使用される場面の背景すなわち社会的・歴史的・文化的な知識が必要となってくる。このような知識の裏付けになるものは固有名詞についての知識である。

文法上は固有名詞として扱われ、問題にされない地名・人名も、上級程度の教材を扱うときは軽視できない。地名・人名が文の理解の上で重要なカギとなる場合が多い。「倉敷といえば人は美術館を思い出す」という一文が、どうしてもわからないという学生がいた。倉敷という土地柄を知っていればなんでもないのである。辞書をひいても普通名詞としての「倉敷

6) 中国語の対訳で注意すべきものについては、本講座第1分冊 大村益夫「漢字語彙」が資料を提供してくれる。

料」の意味が出ているのみだという。これは一例にすぎないが、地名・人名についての知識を欠くために文の真意の理解ができないことはしばしば見られる。では、どの程度の固有名詞について、どの程度の知識が必要かときかれても、明確な回答はできない。ただ、心がけとして、固有名詞を軽く扱わず、できるだけ調べて、知識として蓄積させておくよりほかない。日本の旧国名と州を使う呼び方なども必要である。学生には事典的な内容を持つ辞書を用意させる。岩波の広辞苑や三省堂の新国語中辞典(新刊)などには、固有名詞もかなり多く採録されている。できれば百科辞典も使えるようにしておきたい。地名は地図に親しまなければ覚えられない。

漢字の読み方について

上級になるとつぎのような特殊の読み方をする熟語が出てくる。このようなものについては、予習に先だって読み方の注意を与えておかなければならない。

発作、発足、遊説、間髪を入れず、名残り、融通、切羽詰まる、出納、相殺、五相会議、経文、入水、法度、旅路など

表現の練習について

初級程度では理解と表現は同程度にできることが要求され、また可能でもあるが、中級から上級へと進むにつれて、教材と同程度の内容を表現することは困難となる。そこで理解を主とし、表現を従とする学習になりがちである。しかし、自己の思考内容を明瞭に発表する能力はつけておかなければならない。文法的な正確さは中級までに習得したとして、上級では内容にふさわしいスタイルで表現することが要求される。学習者は教材で種々の文体の読みものを学んでいるはずだが、文体の使い分けは特に練習しなければならない。練習の方法としては、文体の異なる種々の教材にまねて作文させるのがよい。つねに心境作文ばかり書かせていたのではこのような文体の練習にはならない。書簡調・評論調・論文調・報告調などの

指定を与えて、作文を課することが必要である。何々について何々の文体で書けという課題を与えて作文させるのである。

教材の進度

上級教材として単行本を使用する場合と、編集された教科書を使う場合とがある。編集されたものは種々の内容のものを配列しできているが、単行本は1冊の始めから終わりまで、ほぼ同じ種類のものが同じスタイルで書かれていることが多い。このような本は1年かかって1冊を上げるということに意義があるのではなく、このようなものを読む語学力をつけるということが主眼である。したがって、1冊を終えなくても、すでにその目標に達したと考えられるときは、他の本に進むべきである。その反対に、何か月かかってもいっこうにページが進まないということもある。その場合は渋滞の原因が何にあるかを調べなければならない。内容がむずかしいのか、ことばがむずかしすぎるのか、あるいは学習者が勉強しないためか、まず原因を見きわめた上で、その本の中の比較的容易な部分から手をつけるなり、他の本に移るなりしなければならない。また、本の始めは速度がおそくても、進むにつれてしだいに速度をますことも考えられる。これも一つの進歩である。しかし、何を使っても教材自身完全な教材というものはない。教師は使っている教材についてたえず批判と反省を加え、不足するものを補い、不要なものは取り除くように努めることを怠ってはならない。その上、教材の扱い方を工夫し、教材を生かすように、たえず努力しなければならない。教材の適不適ということも、半ばは教師の扱い方いかんにかかっていると知らなければならない。

[付表 J] 早大語研日本語教室で上級用教材として
使用したものおよび使用中のもの(順序不同)

(一般的なもの)

岩 村 忍	アジアの見方	岩波新書
岡 田 喜 秋	日本の旅路	日経新書
亀 井 勝 一 郎	黄金の言葉	大和書房
桑 原 武 夫編	日本の名著	中公新書
大 内 兵 衛ほか	私の読書法	岩波新書
扇 谷 正 造編	私をささえた一言	青春出版社
永 井 道 雄	異色の人間像	現代新書
丸 山 真 男	日本の思想	岩波新書
南 博	日本人の心理	"
中 山 伊 知 郎	日本の近代化	現代新書
新 島 正	ユーモア	潜文社
吉 屋 信 子	私の見た人	朝日新聞社
佐 藤 正 忠	一流人のことば	大和書房
日本経済新聞	私の履歴書	実業之日本社
荒 垣 秀 雄	天声人語	原書房
島 崎 敏 樹	心の風物誌	岩波新書
"	幻想の現代	"
林屋辰三郎ほか	日本人の知恵	中央公論社
松 下 幸 之 助	仕事の夢・暮しの夢	実業之日本社
"	みんなで考えよう	"
森 秀 人	アイデアの秘訣	三一書房
(文学作品)		
井 上 靖	あすなろ物語	旺文社文庫
川 端 康 成	伊豆の踊子	角川文庫

(ことばに関するもの)

西 尾 実	日本人のことば	岩波新書
金 田 一 春 彦	日本語	"
波 多 野 完 治	実用文の書き方	光文社
扇 谷 正 造	現代文の書き方	講談社
N H K 編	ことばの魔術	"
瀬 谷 信 之	電話の話術	光文社
江 木 武 彦	話し方教室	池田書房
大 石 初 太 郎	正しい敬語	大泉書店
土 屋 道 雄	ことわざ 365日	池田書店

(理工学系のもの)

中 谷 宇 吉 郎	科学の方法	岩波新書
中 野 尊 正	日本の自然	"
ロゲルギスト	続物理の散歩道	岩波書店
崎 川 範 行	科学の手帖	光文社
ラジオ東京編	科学への招待	法政大学出版局
天 野 光 三	東京診断	新潮社
朝日ジャーナル	技術は突破する	講談社
中谷宇吉郎ほか	物理学者の眼 (科学随筆全集)	学生社
	世界のなぞ	新潮社
N H K 編	なぜでしょう・質問箱	放送出版協会

(社会科学系のもの)

伊 東 光 晴	経済学入門	光文社
都 留 重 人	経済学はむずかしくない	現代新書
長 州 一 二	日本経済の見方	現代教養文庫
大 内 兵 衛ほか	日本経済図説	岩波新書
有 沢 広 巳 編	日本のエネルギー問題	"

佐々木士師二	消費心理学入門	講談社
加藤昇	プロセールスマン入門	実業之日本社
原田俊夫	マーケティング	早大出版部
(研修コース用教材)―参考のためにあげておく		
林屋辰三郎ほか	日本人の知恵	中央公論社
共同通信社	日本文化の百年	三一書房
金田一春彦	ことばの博物誌	文芸春秋社
菊池寛	父帰る・藤十郎の恋	角川文庫
和田武司編 市川宏	中国の故事と名言	徳間書店
湯沢幸吉郎 渡辺正数	口語文法	右文書院
石綿敏雄 近藤豊勝 桜井光昭	中等文法	明治書院
口語文法講座	用語解説編	明治書院
木原茂	現代作文	三省堂
阿部吉雄 藤堂明保	漢文新選	秀英出版
松尾聡	竹取物語全釈	武蔵野書院
”	源氏物語桐壺全釈	”

[付表 II] 上級用教科書

長沼直兄著 標準日本語読本 再訂巻四(1966)・五(1967) 長風社
改訂巻六・七・八(1958)

国際学友会日本語学校編 日本語読本巻四 国際学友会 1962

国際基督教大学日本語科編

MODERN JAPANESE FOR UNIVERSITY STUDENTS
PART III

国際基督教大学 1966

Howard Hibbett and Gen Itasaka

MODERN JAPANESE: A BASIC READER 日本現代文読本:

(第 25 課~第 60 課) Harvard University Press 1965

Roy Andrew Miller; A JAPANESE READER:

Graded Lessons in the Modern Language 現代日本文読本 (第 48

課~第 75 課)

Tuttle, 1962.

Joseph K. Yamagiwa, ed.

Readings in Japanese Language and Linguistics.

Readings in Japanese Political Science.

Readings in Japanese Literature.

The University of Michigan Press, 1965.